

熊野の  
木林から

# 怪熊野

其の五 「三体月」



和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授



那智勝浦町の下里に出没した「桂男」は月の模様の中に現れる怪異だという。

最近、天体に興味を持つ人が増えている。宇宙研究の進展によって宇宙のさまざまなことが分かるようになるにつれ、夜空を見上げる人は確実に増えている。特に人気なのは、流れ星と月だ。月などは、連日、プロ、アマ問わず多くのカメラマンに撮影され、インターネット上をにぎわせている。月の日々変化する姿と幻想的な模様のいずれとも太古の昔から世界中の人々の関心を惹きつけてきた。信仰の対象にもなってきた。

熊野でも、以前にも紹介した那智勝浦町下里の「桂男」など全国的に有名な月に関する伝承がある。その他では、熊野らしいユニークな月の話として中辺路から本宮にかけて「三体月」の伝承がある。



「幻月」は光の屈折によって月が三つに見える自然現象だが、三体月のモデルなのかも知れない。写真は幻月ではなく幻日。太陽も光の屈折で三つに見えることがある。

その昔、中辺路の高尾山で修行していた修験僧が里に下りてきて「11月23日(旧暦)に高尾山に登り月を拝むと三体の月が現われる」と村人に告げた。村人が高尾山に登って確かめると、里では一つに見えた月も山頂では月の左右にも月が出た。このため、11月23日の夜には高尾山頂で「月待ち」を行うようになった。月待ちとは、特定の月齢の夜に月の出を待って月を祀(まつ)る行事。中でも、二十三夜の下限の月待ちは各地で盛んに行われた。下限の月の出は深夜。11月23日の山頂での月待ちはさぞ寒かったことであろう。三体月の話は、高尾山の他では中辺路の上田和(うわだわ)や要壘森山(ようがいのもりやま)、本宮町の大瀬でも残っている。また、12世紀の『熊野権現

垂迹縁起(くまのこんげんすいしゃくえんぎ)に「本宮大湯原イチイの木に三枚の月が現れた」との記述もある。

三体月については、熊野の情報を発信し続けているインターネットサイト「み熊野ねっと(主催者つ氏)」に詳細に整理されている。非常に秀逸なサイトだ。つ氏は、光の屈折による幻月(げんげつ)や、冷え込みによる大気の攪乱(かくらん)時に観察される現象ではないかと考察されている。毎年のように中辺路や本宮町大瀬では旧暦の11月23日に観月会が行われているので、参加され、ご自身の目で確かめるのも一興であろう。今年も開催されるようなので、ご興味のある方は主催者に連絡してみると良い。ちなみに、今年の旧暦11月23日は、年が明けた1月2日になる。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

